

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：24520319
研究課題名(和文) アイルランド・モダニズム文学における身体表象

研究課題名(英文) Body Representations in Irish Modernism

研究代表者

坂内 太 (SAKAUCHI, FUTOSHI)

早稲田大学・文学学院・准教授

研究者番号：60453990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アイルランド・モダニズム文学の諸作品を研究対象として、ジャンル横断的な身体表象論的分析を行い、その特異性を示した。特に、周縁化・神話化された女性・子供の声なき声に対する脱神話化や主体性の回復、告白を軸とした自我の増長と収縮を経由する身体的変容の主題的重要性を明らかにし、20世紀初頭から今日まで連続と展開されてきた身体表象の諸相とその波及的な影響について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This academic project consists of several distinct researches on body representations in the literature and drama of Irish modernists, in which I investigated the extent to which they strived to excavate lost voices and dignity of Irish women and children in terms of sexual traumas and ill-treatment, and which they captured the physical and spiritual transfiguration of agonized souls. Though those researches, I threw light on how constantly Irish writers, poets, and playwrights have had serious engagements with these unique body representations in the modern history of Anglo-Irish literature and drama.

研究分野：人文学

キーワード：モダニズム文学 身体表象論 アイルランド演劇

1. 研究開始当初の背景

本研究の申請者は、これまで、アイルランドの作家ジェームズ・ジョイスの諸作品における身体イメージのリサーチを重ねてきた。ジョイス作品の特殊な身体表象を浮き彫りにするために、初期短編に頻出する〈変容の失敗〉のモチーフを丹念に検証し、このモチーフが中期の作品『若き芸術家の肖像』においても、ジョイスが作家的なテクニクを変えながら持続的に探求していることを明らかにした。また、種々の批評理論の投入が中心を占めた過去数十年のジョイス研究と比して、身体性というテーマに特化した研究を行うことで、ジョイス作品における身体表象論という新たなアプローチの形成に寄与したと考えられる。

ジェームズ・ジョイスが、1914年から1921年に渡って書き続けた『ユリシーズ』が、モダニズム文学のみならず、世界文学に大きな影響を及ぼしてきたことは明白であるが、この長編が第一次世界大戦の大量殺戮兵器による大規模な破壊と国家的な荒廃の真っ只中に書かれた一方で、作品中に膨大なカタログ式とも言えるほどの人間群像を盛り込み、それらの人々の日常的な身体性を活写していることを思えば、この作品における人間身体表象に関する研究がほとんどなされてこなかった事実は奇異と思われた。

その点においても申請者は従来のジョイス研究の空白に着目して、基礎的な研究形成をなしえたと考えられる。本研究は、こうした具体的な研究背景の中で、ジョイスが芸術的な理念とテクニクとの両面において影響を受けたJ・M・シング、及び、20世紀初頭に様々な劇作家と共にW・B・イェイツが牽引した演劇運動とその波及的な影響、ジョイスが芸術的主題の点で直接的な影響を及ぼしたサミュエル・ベケットに目を向けることにより、アイルランドのモダニズム文学を構成する主要な詩人、小説家、劇作家における身体表象の有機的な連関とその特異性を明確化し、それらの横断的な分析を展開することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、アイルランドのモダニズム文学における身体表象の相互連関と特異性を明らかにすることを目的とする。その基礎となるのは、身体表象分析を軸とした作品の個別研究、及び、身体表象を中軸とした相互の間テクスト性の検討であり、その中心となるのは、アイルランド・モダニズム文学の中核を成す20世紀初頭の演劇運動、ジェームズ・ジョイスによる小説、サミュエル・ベケットの戯曲、及び、それらの影響を受けた後の作家・劇作家・詩人らの作品分析と比較検討で

ある。

ジェームズ・ジョイスの作品については、20世紀初頭の演劇運動で特異な位置を占めるJ・M・シングの作品との比較検討を行いつつ、シングが深く関与していた演劇運動と身体変容モチーフに注目し、初期モダニズムとジョイス作品との接続点を明らかにすることを目指した。サミュエル・ベケットに関しては、後期作品を取り上げ、同時代の詩人シェイマス・ヒーニーの作品との創作モチーフに関する共通点を、身体表象を中心として検証しつつ、また、社会的な出来事を記憶・伝播する芸術作品の機能に着目しつつ、以後の作家・劇作家・詩人・映画監督等への影響の系譜を探ることを目指した。

上記のリサーチを踏まえ、アイルランドのモダニズム文学・演劇に頻出する社会的トラウマ・性的トラウマのモチーフや、植民地としての歴史を背負ったアイルランドにおける「植民地内の植民地」とも言うべき、虐げられた女性や子供のモチーフを、特に、これまで先行研究が無かったアイルランド・モダニズム文学の黎明期から後期までを貫く身体表象の側面から捕捉・分析することを目的とした。

3. 研究の方法

先ず、20世紀初頭の演劇運動の中で顕著に表れた変身のモチーフ、とりわけJ・M・シングの戯曲に現れた変身のモチーフを分析し、変身の投影としての鏡のモチーフとの関連を検討した。同様に、ジェームズ・ジョイスの作品における変身のモチーフを分析すると共に、その投影としての鏡のモチーフを分析して、シング劇との類似点を検証した。また、これと平行して、シング及びジョイスの書簡を分析して、シングから見たジョイス像、およびジョイスから見たシング像を検討した。その結果、ジョイスの創作が、シング劇の影響下にあり、シングによる変身と鏡のモチーフを継承した形跡が浮き彫りになった。

この「鏡」と「変身」のモチーフに関して、シング劇では、強大な支配者の下での卑屈な精神と歪んだ自己認識から、膨張したエゴに基づく過大な空想に移行すること、さらには、過剰な自己評価が、痛切な幻滅を経て、全く別の新たな自己認識に向かうことが明らかとなった。同様に、後発のジョイス作品においても、卑屈な精神と歪んだ自己認識から、過剰な自己肯定と現実逃避的な空想に移行すること、さらには、シング劇と同様に、深い幻滅を経て、新しい自己の発見と自信の回復とに向かうことが明らかとなり、シング劇とジョイスの小説とに、ジャンルを超えた同質の心理的振幅が重要要素として含まれていることが明らかとなった。また、これらの「変身」モチーフを、ジョイスが初期短編集

から一貫して取り上げてきた「告白」のモチーフと突き合わせることで、両者の関係、特に「告白」が「変身」の契機となり得る可能性について検証した。

サミュエル・ベケットと身体表象に関するリサーチでは、1970年代初頭のベケット劇『私じゃない』が扱った主題(女性の社会的、経済的周縁化)を、現実の類似の出来事を扱ったマス・メディアによるテキストと比較検討した。また、同時期に同一のテーマを扱った詩人シェイマス・ヒーニーの詩集『冬を生き抜く』(特に“Maighdean Mara”、“Limbo”、“Bye-Child”の三編)を分析し、同様にマス・メディアによる言説との比較を行った。この結果、マス・メディアが女性を社会の周縁に追いやって主体的な声を奪うだけでなく、女性の社会的理想像を恣意的に生み出し、流布する経緯が明らかとなった。また、女性の実像が、創出されたマス・メディアの偏向した言説や、司法制度の実際の運用面における歪み、また、国の在り方に大きな影響を与え続けてきた宗教的教義とその実践等によってかき消され、本体に置き換わる別の事実として伝播していく経緯も明らかとなった。その一方で、ベケットとヒーニーの作品が、客観的なスタンスで事件を捉え、社会の周縁に追い立てられた女性の、いわば主体的な声の復権を目指したこと、芸術作品を通じて事実の社会的な記憶を残そうと努めている形跡が浮き彫りになった。また、その一方で、類似の事件と様々な作家・劇作家・詩人・映像作家の作品とを対比することで、アイルランド文学・演劇・映画における身体表象の重要性を検討した。また、このテーマを裏付けるものとして、20世紀アイルランド文学・演劇において(とりわけ、ブライアン・フリール、マリナ・カー、フランク・マックギネス、トム・マーフィー等、今なお活躍している劇作家による作品を中心に)、社会の周縁に置かれる女性の表象がどのように生み出されてきたかを概観することも研究目的の一つとした。

4. 研究成果

アイルランド・モダニズムにおける身体表象の重要性を多角的に検証し、その重要性の一端を明らかにすることが出来た。特に、20世紀初頭の演劇運動とジョイス作品とにおける身体表象の関連性と重要性、ベケットの後期演劇とシェイマス・ヒーニーの詩における女性の身体表象を巡る近似性、さらには、こうした身体表象と、1980年代から現代にいたるまでの様々な芸術作品(小説、演劇、詩、映画、テレビドラマ、アニメーション映画など)における身体表象の関連性の一部を浮き彫りにすることが出来た。20世紀初頭のアイルランドにおける演劇運動では、抑圧された状況下での歪んだ自我(植民地下のアイルランドを現す)が、卑屈な若者や焦燥した老人として描かれ、陶酔や過剰な自己評価や理想

化を通じて、さらに別の形に歪むが、他者の助力や自己の再評価を通じて、全く新しい自立した自己を得るというヴィジョンを繰り返して生み出したこと、また、その変容の契機として告白が重要な劇行為となることを明らかにし、さらには、そうした自我の肥大と、自己の再評価による自立のモチーフが、演劇ジャンルを超えて文学に影響を与えたことを明らかにした。また、自我のいびつな肥大化と、妄想の破綻と新しい自覚という一種の振り子運動が、現代アイルランド演劇にも見られ、前世紀初頭から連綿と受け継がれ、発展してきた重要モチーフである可能性を明らかにした。特に、J・M・シングの戯曲と、ジョイスの小説に、文学ジャンルを超えた「告白」と「変身」という身体表象を巡る共通項があること、ジョイスが意図的にシング劇のテーマを取り込み、独自の応用を見せたことを、両者の交友を深めた経緯を辿り、書簡等を検証することによって明らかにできた。この成果は、現代アイルランド演劇における類似テーマの展開、現在もアイルランド演劇界の重鎮として影響力を発揮し続けるブライアン・フリールやトム・マーフィーの戯曲との関連を示唆し得たと思われる。この点で、本研究は、アイルランド文学・演劇における身体表象論的分析のさらなる研究の必要性和妥当性を浮き彫りにしたと考えられる。

1970年代初頭のベケット劇およびヒーニーの詩における身体表象、とりわけ社会的・経済的に周縁化された女性の主体性の復権を巡っては、以後の様々な作家、劇作家、詩人、映像作家達の作品における身体表象 例えれば、特に、劇作家フランク・マックギネスによるテレビドラマ『鶏小屋』(1989年)、マーゴ・ハーキン監督による映画『おやすみ、赤ちゃん』、1991年のポーラ・ミーハンによる詩集『冬の印を受けた男』、2000年のオーウェン・フィッツパトリックによる短編アニメ『ザ・ネスト』、2002年のパーブラ・ニ・フィヴとイヴオンヌ・クインによる戯曲『盗まれた子供』および同年に公開されたピーター・マラン監督による映画『マグダレン・シスターズ』など と共に、アイルランド文学・演劇の中で持続的な文脈を形成してきた経緯の一端を明らかに出来たのは、大きな成果であった。同時にまた、この研究では、芸術による美的構築物が、アイルランドの現実における様々なトラウマ的出来事を、マス・メディアによる情報の歪曲に抗うかたちで、丹念に記憶しつづける過程の一端を明らかにした。この研究テーマには、さらに深く探求すべき可能性、すなわち、19世紀末から20世紀初頭におけるアイルランド文芸復興運動が生み出した様々な身体表象から、21世紀の今日にいたるまでの様々な芸術作品の身体表象を有機的に繋ぐ文脈の発掘と、その詳細な

検討の妥当性を示唆することが出来たと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 坂内太、Confession, Vacillation, and Transformation: A Study of Aesthetic Influence of Synge on James Joyce、『早稲田大学文学研究科紀要』、査読無、60 輯第 3 巻、2015 年、36-46 頁。

2. 坂内太、忘却の記憶 周縁化の痕跡と美的表象の一考察、『表象・メディア研究』、査読無、第三号、2013 年、13-37 頁。

[学会発表](計1件)

1. 坂内太、Redressing the 'Chicken Boy' myth: media discourse concerning it and Seamus Heaney's 'Bye-Child'、IASIL Japan the 31st International Conference、2014 年 10 月 11 日 早稲田大学(東京都新宿区)。

[図書](計1件)

1. 坂内太、開文社、『アイルランド文学：その伝統と遺産』、2014 年、「ブライアン・フリール、トム・マーフィー、マーティン・マクドナー：現実の重圧とフィクションの力」、468-489 頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

氏名：坂内 太 (FUTOSHI SAKAUCHI)

所属研究機関：早稲田大学

部局：文学学術院

職名：准教授

研究者番号：60453990